

論文要旨

本書はフィクション概念の本質を探究する哲学的分析を課題としている。

本書では、まずフィクション概念の多義性を確認したのち、言語的な作品の一ジャンルとしてのフィクション概念に定位し、解明を試みた。それがどのようなジャンルであるかについて予備理解を固定するため、本書では、作品に提示されている語りがその作者から遊離するという事情に注目した。例えば、シャーロック・ホームズの物語はコナン・ドイルの制作によるが、そこで語っているのはドイルではなく作中人物のワトソン博士である、という具合に、フィクションの語りは作者の制作によるものではあっても原則として作者の語りではない。語りの技法の多様性に応じてこうした遊離現象には多様な形があるが、どのような形をとるにせよ、フィクション（虚構作品）とは、こうした二重性の何らかの形態を呈している作品だというのが本書の基本了解である。本書では、この特色を成り立たせている機構の解明を目指して、おおよそ記号論の区分に沿って、統語論（第一章）、意味論（第二章）、語用論（第三章～第五章）という順序で考察を進めた。

語用論に割いた紙幅が大きいのは、その重要性に関する本書の認識の反映である。そして、語用論を重視する点で、本書は分析美学の伝統に準拠している。また、参考議論として取り上げた素材の点でも、本書はおおむね分析美学の伝統に準拠している。その伝統から少々逸脱するのは、統語論を論じた第一章、ならびにプラトンに言及した第三章の一部である。とりわけ、第一章では、語用論を重視するあまり統語論的な考察を軽視しがちな一連の議論について、批判を行った。本書では、語用論に立脚した立場を取りつつも、それが統語論的な考察の尊重と両立することを主張した。

フィクションの意味論を論じた第二章では、上記の語りと作者の分離という事態を理解する上で、指示や真偽に関する考察が果たしうる役割に焦点を絞った。そして、意味論的考察はそうした役割を担いえないというのが本書の立場である。なお、フィクションに関する意味論的な論議は時に、作中人物その他の虚構の対象に存在論的身分の話題に直行しがちだが、本書では、そうした存在論の問題に先立ち、そもそもフィクションとは何なのかという基本理解の分析が中心課題となっている。

最終的に本書が支持したのは、語用論的な理論のなかでも、とくに、受け手の側に一定のごっこ遊び的な想像が指定される、という事態に注目したウォルトン流の理論である。それによれば、虚構作品とは、受け手に一定の想像を指定する小道具となることをその存在意義（機能）としているような事物のことに他ならない。

本書の立場は、基本的な考え方の点ではこの規定に沿いながら、二つの点でそこから離反する。第一は、ごっこ遊び的な想像を指定する小道具となる機能を持った事物の中で、特に一定の作品世界を伴う事物に中心的な関心を寄せるという点である。第二は、この「一定の作品世界を伴う」という規定の意味についての、受け取り方の違いである。

本書の認識では、第一の相違はあまり重要なものではない。それは、例えて言えば、得

られた地勢図の実質的内容については認識を共有していながら、境界線を引く際に、より狭い区域を線で囲うか、それよりももう少し広い領域まで囲うかという選択の違いである。

他方、第二の違いは、作品世界という概念（あるいは作品理解という概念）についての大きな見解の相違につながる。作品世界とは、ウォルトン流の理解では、ある作品において虚構的真理とされる一連の命題の集合にほかならないようなある特定の世界（ないしはそのような集合を共有した特定の世界集合）である。しかし、本書の立場では、作品世界は、そのような特定の世界（あるいは特定集合）と単純には同一視できない。作品の公式的、一次的な表象内容としてそのような世界（世界集合）を特定することには何も異論はないけれども、そのような世界（世界集合）を特定することは、まだ作品理解の一手手前の段階にとどまる（それは、小説の場合で言えば、内容の梗概を読んだり伝え聞いたりした段階にとどまる）。作品理解の実質をなすのは、その公式的表象内容の特定ではなく、実際の読書経験の中でその公式的内容を具体的な様相の下で——時に極めて非現実的な様相の下で——提示する語りに接する経験である。作品を理解するとは、そのような「与えられ方」を顧慮しつつ、そのヴェール越しに公式的な表象内容に接することである。

こうした言い方が多分に比喩的で捉え所のない部分を含むことは認めなければならない。とはいえ、表象内容という概念の多層性（少なくとも二層性）という論点の趣旨は、第七章で取り上げた一連の具体例を考えれば明らかである。それらの事例では、作品世界はけっしてくっきりとした焦点を結ぶことはなく、つねに二重、三重の輪郭を伴って提示されている。この事実は、表象内容という概念について、各種の芸術作品をカバーしうるより本格的な検討の出発点となるべきものである。

論文審査結果の要旨および担当者

提 出 者	清塚 邦彦
論文審査担当者	(主査) 教授 直江 清隆 教授 戸島 貴代志 准教授 荻原 理
論 文 名	フィクションの哲学——虚構概念の哲学的分析
<p>本論文は分析哲学の見地からフィクション概念の本質を探求した力作である。論者はフィクション概念の多義性を確認したのち、語りがその作者から遊離するという事情に注目しながら、言語的な作品の一ジャンルとしてのフィクション概念に定位した考察を試みる。そして、統語論（第一章）、意味論（第二章）、語用論（第三章～第五章）という順序で考察を進め、虚構概念の核心部分を作品によって受け手に対して一定の想像が指定されるという事情に求めるウォルトンの語用論の立場を評価する。その上で、小道具となる機能を持った事物として作品世界について、独自の理解を提示する。</p> <p>第一章では、統語論的な考察を軽視しがちな一連の議論を検討し、フィクションに関して語用論が統語論的な考察の尊重と両立することを主張する。第二章では、虚構の対象の存在論的身分を話題するに先立ち、フィクションとは何なのかの基本理解が必要であり、意味論的考察が、語りがその作者から遊離することの理解に対する役割を担いえないことを明らかにする。</p> <p>第三章から第五章では、フィクションの本性を、作品の提示のされ方や受けとられ方に求めようとする語用論の考え方を主題とする。第三章では、フィクションは何事も主張していないとする非主張説や、フィクションにおいては言語行為が「偽装」されているとする偽装説について検討し、後者に関しては虚構的な発言の本質をもつばら発語内行為のレベルに求めるジョン・サールの言語行為論を批判する。第四章では、グライスに依拠するグレゴリー・カリーの理論について批判的論評を行い、ある作品がフィクションであるかどうかは作品そのものの言語的特性やそれを取り巻く社会的慣習に由来することを主張する。第五章では、フィクション概念の基盤を受け手によるごっこ遊び的な想像に求める考え方の代表者ケンダル・L・ウォルトンの議論を検討し、フィクションがごっこ遊びの小道具となるという機能をもつ事物であり、また特に一定の作品世界を伴うような事物であることを明らかにする。</p> <p>以上の見地に立って、第六章と第七章では作品世界の概念を検討する。第六章では、虚構に関する発言の真理条件の問題について、ルイスの可能世界論をはじめとする主要な見解を逐次批判的に検討し、作品によって受容者に指定された想像の内容としてのウォルトンの作品世界を批判的に吟味する。第七章では、第五章で取り上げたようなフィクション性（フィクション的真理）の定義がフィクション性の必要条件の指摘にしかならず、未だ定義としては不十分だという、後年のウォルトンの指摘の吟味を通じて、本書で追究してきたフィクション論について再評価と補足を行う。</p> <p>本論文は、分析哲学におけるフィクション論に対する包括的で緻密な議論の配備をしつつ、虚構世界論に新たな見方を与えるものであり、この成果は斯学の発展に寄与するところ大である。</p> <p>よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	

